

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520535

研究課題名(和文) 政治言語の通時的研究

研究課題名(英文) A diachronic study of political languages

研究代表者

東 照二 (Azuma, Shoji)

立命館大学・言語教育情報研究科・教授

研究者番号：50368023

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：政治において、聞き手を『説得』させるために中心的な役割を果たすのは『言語』であるという精神のもと、本研究は言語と政治的リーダーシップの関係を通時的に考察するものである。もっと厳密にいうと、次のようなリサーチ・クエスチョン(質問)をもとにすすめた。それは、日本の政治的リーダーたちは、どのようなレトリカル手法(修辭的技法)を用いて、国民に話しかけたのか？政治的リーダーたちの説得力は、どの程度、有効であったのか？といった質問である。政治言語を調査、分析して行く中で、本研究では、理論的支柱である「ラポルトトーク」と「レポートトーク」が有効であることがわかった。

研究成果の概要(英文)：In the spirit of language as the central force in political persuasion, this study has examined the relationship between language and political leadership diachronically. More specifically, the following questions were addressed: What rhetorical strategies did the Japanese leadership use to speak to the nation? How effective was the persuasive power of the language the leadership demonstrated (or failed to demonstrate)? In analyzing the language of leadership, the theoretical constructs of rapport talk and report talk were proven to be useful tools.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：政治言語

1. 研究開始当初の背景

政治家たちの言語使用に関する談話分析研究は、レトリック研究が盛んな欧米では、多く行われて来たが、日本では欧米に比して、数量ともに限られたものであった。その背景には、説得を目的とした言語使用に対する漠然とした不信感、さらに「沈黙は金なり」とする伝統的な考え方なども影響してきたといえよう。そこで、本研究では、戦後の政治に限って、政治家たちの言語使用の実態はどうなっているのかを、通時的に、また理論的支柱、フレームワークをもとに検討してみることを出発点とした。

2. 研究の目的

戦後政治は、自民党の一党支配からその崩壊、利益誘導型の政治から不利益分配型への政治への転換などの政治の力学が、大まかな流れとして観察される。こういった観察は、政治学分野でなされるものであるが、これは政治家たちの言語使用と、どのようにリンクしているのだろうか？特に、民主主義国家において、政治家たちが国民、投票者から支持を集め、信任されるための合法的で最も効果的な手段となると、それはことばによる説得であるといえる。この視点について、たとえば、政治レトリック言語の研究家であるチャーテリス・ブラック (Charteris-Black, 2005) は、その仮説を次のように述べている。the most important type of behavior by which leaders mobilize their followers is their linguistic performance. In democratic frameworks it is primarily through language that leaders legitimize their leadership.

(リーダーたちが自分たちの賛同者を行動にかりたてるための最も大切な行動は、ことばのパフォーマンスである。民主的なフレームワークでは、リーダーたちが自分たちに正当性を付与するのは、第一義的に、ことばを通じてなのである。)

この政治言語への圧倒的信頼、優位性は、顧みて、日本の政治ではどのように具現化されているのだろうか。(あるいは、この仮説は、日本の政治風景にはあたらぬのだろうか。)

本研究では、戦後の政治的リーダーたち(主に首相)、さらには、国家の象徴としての精神的リーダーである天皇(昭和天皇、今上天皇)は、どのようなことば、文構造を使い、国民と対峙してきたのか、そのメッセージを包み込むレトリックとはどのようなものか、また通時的にみて、それはどのような変遷をとげてきたのか、またそれは社会言語学分野で発達してきた理論的フレームを使うと、どのように解釈することが可能か、などを研究することを目的としている。

3. 研究の方法

主に政治家たちの諸演説のテキスト分析を中心に進めたが、平成24年度以降は範囲を広げて、戦前のリーダーたちの音声資料も研究資料に加えて研究を行った。理論的支柱として、デボラ・タネンの「リポートトーク」「ラポートトーク」という概念のもと、情報と情緒という二つの側面から分析を行った。さらに、社会言語学からの概念として、「力」と「仲間意識」(ブラウン・ギルマン)という理論的フレームワークも援用した質的研究を行った。さらには、メタファー研究、特に、認知言語学者のジョージ・レイコフの主張する「慈愛的母親」(nurturing mother)と「厳格な父親」(strict father)という相対立する概念が、日本の政治風土ではどのように具現化されているのか、あるいはそれは不適切な概念なのかについても考察を行った。

4. 研究成果

通時的にみて、大きな流れとして、「力」から「仲間意識」へのシフト、「リポートトーク」の多用から「ラポートトーク」の併用へのシフトを同定することができた。これは、政治的エリートとしての権威に準拠した知的、規範的な高級言語、また書き言葉的な非丁寧体、一方的な講義スタイルから、政治的非エリート(あるいは、疑似政治的非エリート)の共感を生み出そうとする日常的な言語、大衆文化的な非高級言語、また話し言葉的で、物語的な「語り」言語へのシフトと形容することもできよう。文末表現でいうと、「である」スタイルから「です・ます」スタイルへのシフトと重なるものである。このシフトは、ある意味、政治を一部の限られた知的エリートのものから、一般大衆へとその所有権を転換させるものでもあるといえる。いわば、政治の民主化が、政治家たちが話すことばを通じて行われたと解釈することもできる。さらに、興味深いことに、権威・体制のことばから、仲間意識・共感・つながりのことばへのシフトは、なにも政治的リーダーのことばだけでなく、天皇という国民精神的リーダーのことばにもはっきりと観察することができる。特に、象徴的なものは、昭和天皇のラジオによる所謂「玉音放送」、そして今上天皇のテレビによる東北大震災直後のビデオメッセージである。ともに、天皇が直接マスメディアを通じて、国民に直接語りかけた極めて稀なケースである(これらは、日本の歴史始まって以来の出来事であり、第一回目と第二回目の放送であった)。興味深い例は、話し手である天皇が使う一人称代名詞(明示されている場合、明示されていない場合も含めて)である。「朕」という究極の排他的代名詞(exclusive pronoun)から「わたしたち」という包括的代名詞(inclusive pronoun)への転換を、歴史的事実として明確に確認で

きたことは、政治的リーダーの言語使用の変遷の観察結果と重なっているといえるだろう。特に、包括的代名詞の使用は、権威の象徴としての天皇の地位から一般国民の立場、地位にまで「降りて」行くという意味において、アコモデーション理論 (accommodation theory) に照らし合わせて解釈すると、一種のダウンワード・コンバージェンス (downward convergence) あるいは「下方への同調」ととらえることもできる。総じて、政治言語に関する本研究は、今後の日本における通事的社会言語研究において、新しい展望をもたらす可能性のある分野であることを示したといえるだろう。

さらに、本研究の成果については、以下の学会で口頭発表、さらには論文、書籍の形でまとめて発表することができ、単に学界のみでなく、広く社会全般、また国際社会に向けて発信することができた。これは、言語研究成果の社会的・世界的発信という点でも一つの大きな成果といえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

東照二、橋下語の魔力を読み解く、中央公論、127、8、2012、138-141 (査読無)

東照二、政治家のことは：情報と情緒、日本語学、31、4、2012、20-35 (査読無)

東照二、どじょう宰相の言語力を診断する、中央公論、126、12、2011、63-70 (査読無)

東照二、Soapbox speeches in the summer of *Seiken Kootai*, Japanese Language and Literature. Vol. 45.1. 2011, (査読有) pp141-167.

[学会発表] (計 4 件)

AZUMA, Shoji, "One form of democracy: collectivism and Japanese earthquake slogans," VAKKI symposium, University of Vaasa, Finland, February 13-14, 2014

AZUMA, Shoji, "Collectivism and activism on Japanese earthquake t-shirts," The Cross-cultural Pragmatics at a Crossroads 3: Impact - Making a Difference in Intercultural Communication, University of East Anglia, U.K., June 26-29, 2013.

AZUMA, Shoji, "Report versus rapport talk in the aftermath of the Japanese Earthquake: How did the Prime Minister and Emperor speak to the population?" The 2nd International Conference on Communication, Cognition and Media: Political and Economic Discourse, Catholic University of Portugal, Braga, Portugal, September 19, 2012.

AZUMA, Shoji, "Leadership and language: the role of the persuasive power of language," An international Conference on Rebuilding Sustainable Communities after Disasters in China: Best Practices and Lessons Learned, A special session on 3/11 disaster and its rescue and post-disaster rebuilding in Japan, University of Massachusetts Boston, November 15-17, 2012.

[図書] (計 3 件)

東照二、光文社新書、なぜ、あの人の話に耳を傾けてしまうのか？ 公的言語のトレーニング、2014、235

東照二、Cambridge Scholars Publishing, Rebuilding Sustainable Communities after Disasters in China, Japan and Beyond, 2014, 413, pp.203-224.

東照二、ひつじ書房、コミュニケーション能力の諸相、2012、464、261-285

[産業財産権]

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等
なし

6 . 研究組織

(1)研究代表者

東 照二 (AZUMA, Shoji)

立命館大学・言語教育情報研究科・教授

研究者番号：5 0 3 6 8 0 2 3

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：